



インドネシア運輸省職員に日本の鉄道運営について講義する(撮影:久野真一)



2005年、タイ・バンコクの車両基地で、タイ国鉄の車両状態を調査する五十嵐さん

「鉄道の安全性は、事故の経験を教訓とすることから始まります。乗客の命を預かる鉄道員として、決して忘れないでください!」

開始から1時間を過ぎても、JICA 専門家・五十嵐英晴さんの口調は相変わらず熱を帯びたままだ。インドネシア・ジャカルタ都市圏東部の街・プカシ。同国運輸省の研修施設で、若手職員約50人が真剣な表情で五十嵐さんの講義に聞き入っていた。

2010年7月よりインドネシア運輸省鉄道総局に配属され、安全管理の能力強化に努めている五十嵐さん。職員向けの研修やワークショップを実施しているほか、鉄道の運行管理システムや保安システムの改善、法整備などさまざまなアドバイスを行っている。

「悲劇を繰り返すまいと、日本には過去の鉄道事故の詳細を紹介する展示施設があります。この国でも若い経験を糧に、安全性を高めていってほしい」

五十嵐さんは、蒸気機関車が走る国鉄石巻線(宮城県)の線路沿いの町で生まれ育った。小さなころから、鉄道のメカニックに興味を抱いていた五十嵐さん。「東京の水産会社の船に乗る父親の送迎に、年に1度、東北本線の長距離特急列車を利用するのが楽しみでたまらなかった」という。1985年、

旧国鉄(現東日本旅客鉄道株式会社:JR東日本)に就職。以来、車掌や駅員といった現場実習を経験した後、車両の保守・設計など、技術の最前線では着々と実績を積み上げてきた。「初めて自分が設計した車両が走った時の感動は忘れられません。思い出されるのは、かつて二階建ての通勤車両をデザインした時のことだ。

そうした経験を通じて、94〜96年、タイ国鉄の人材育成を目的にJICAが実施した「鉄道研修センタープロジェクト」にJICA専門家として派遣される。運転シミュレーターを使った訓練の導入や研修カリキュラム作りに力を入れたほか、訓練生を指導する教官たちの指導力向上と意識改革にも取り組んだ。

当初は、「教官としてのプライドが高く、講義ではメモすら取ろうとしない者もいた」と五十嵐さん。だが、「恥かき(誤って理解していたことを改める)、

メモ書き(一度言われたことは忘れない)、汗かき(体で覚える)」といった、列車のオペレーションにも直結する、鉄道マンとしての大切な視点を繰り返し強調してきたことで、「自分たちが次代の人材を育てる」との意気込みが教官たちの間に徐々に生まれてきた。

メモ書き(一度言われたことは忘れない)、汗かき(体で覚える)」といった、列車のオペレーションにも直結する、鉄道マンとしての大切な視点を繰り返し強調してきたことで、「自分たちが次代の人材を育てる」との意気込みが教官たちの間に徐々に生まれてきた。

事業者の取り組みなどを伝えてきた。

「労働集約型産業である鉄道事業だけで黒字経営を行うのは難しいので、日本の鉄道事業者は、不動産業、商業施設の運営などの関連事業によって早くから健全経営に努めてきました。しかし、それも本業の安全・安定輸送があつてこそ。こうした経営手法に関するアドバイスも行いました」

またそのほかにも、バンコクで建設準備が進んでいた、国際空港と都市中心部を最短15分で結ぶ「エアポート・レール・リンク」※の建設に当たって、日本の空港連絡鉄道の経験をもとに、さまざまな助言を送ってきた。

そんな専門家としての豊富な経験を持つ五十嵐さんが、常に心掛けているのが、「背伸びせず、できることからコツコツと始める」ということ。「どの国でも、隣の国に負けたくない、最新の鉄道システムを手に入れたい、という衝動に駆られるものです」と五十嵐さん。「しかし、そのための基盤も経験もない国にいきなり過剰な技術支援などを行うのは危険です。鉄道事業者がまず取り組むべきことは、何よりも安全な運行に必要な規則作り、設備の整備と確実な保守・管理、人材育成などであり、それらはすべて乗客の安全性・快適性のためでもあります」と話す。

「日本では、各事業者が個々の実情や規模に合った運行規則を作って安全性を高め、持続可能な経営に取り組んで

います。そんな日本の運営手法をベイスに、各国の状況に合わせた形で事業に協力していく。それも一つの日本ならではの貢献になり得るでしょう」

時間ができると、五十嵐さんは自分が支援に携わる都市や地域の列車に乗り、人々がどんな表情で鉄道を利用しているか見て回るといふ。「乗客が何を求め、何に困っているか、彼らの声に常に敏感でありたい。実際に乗らないと分からないことも多いのです」。

人々のために安全・快適な鉄道を。優しいその笑顔の奥に、鉄道マンとしての揺るぎない信念が垣間見えた。

タイ
インドネシア

2008年、日本鉄道車両輸出組合とベトナム国鉄の共催で、ベトナム・ハノイで開催された「高速鉄道セミナー」に出席し、新幹線の持つ技術と優位性について紹介。日本から経済産業省と国土交通省、大手車両・重電メーカーが出席するなど、まさに官民を上げたオールジャパンでの参加となった ©日本鉄道車両輸出組合 倉澤泰樹

※2010年8月に開業。

鉄道メカニックに魅せられた少年時代

「鉄道の安全性は、事故の経験を教訓とすることから始まります。乗客の命を預かる鉄道員として、決して忘れないでください!」

開始から1時間を過ぎても、JICA 専門家・五十嵐英晴さんの口調は相変わらず熱を帯びたままだ。インドネシア・ジャカルタ都市圏東部の街・プカシ。同国運輸省の研修施設で、若手職員約50人が真剣な表情で五十嵐さんの講義に聞き入っていた。

2010年7月よりインドネシア運輸省鉄道総局に配属され、安全管理の能力強化に努めている五十嵐さん。職員向けの研修やワークショップを実施しているほか、鉄道の運行管理システムや保安システムの改善、法整備などさまざまなアドバイスを行っている。

「悲劇を繰り返すまいと、日本には過去の鉄道事故の詳細を紹介する展示施設があります。この国でも若い経験を糧に、安全性を高めていってほしい」

五十嵐さんは、蒸気機関車が走る国鉄石巻線(宮城県)の線路沿いの町で生まれ育った。小さなころから、鉄道のメカニックに興味を抱いていた五十嵐さん。「東京の水産会社の船に乗る父親の送迎に、年に1度、東北本線の長距離特急列車を利用するのが楽しみでたまらなかった」という。1985年、

インドネシア・ジャバタベック鉄道の整備士と談笑する五十嵐さん。メンテナンスの質が車両の安全性を左右するため、現場でのヒアリングも欠かせない(撮影:久野真一)

JICA専門家
IGARASHI Hideharu

五十嵐英晴 さん



「“恥かき、メモ書き、汗かき”の心を大切にしたい」

日本の鉄道技術の最前線を駆け抜けてきた、JR東日本の五十嵐英晴さん。
“鉄道マン”としての豊富な経験を生かし、
タイやインドネシアで鉄道分野の協力に取り組んでいる。

第 21 回

ゲンバの風

